

非血縁家族を構築する人たちについての 文化心理学的考察

——その人たちへの社会的スティグマをめぐって——

古 澤 頼 雄

文化が人間のあり方に大きく影響することは様々な事象によって自明のことであるが、人間のあり方に文化を超えたかなりの共通性があることもまた見逃せない事実である。そのひとつに社会的スティグマ（烙印）がある。社会的スティグマとは、ひとが相手を自分とは異質なものの、汚れたものと見ることによって、相手の存在によって自分の幸せが脅かされると思えたり、理解したくないという気持ちから、相手と一層距離を置きたいと考える心理である。このことは、大勢の人たちが共通にもっている見方からはずれた対象に対して特に顕著にあらわれる。高齢者、異人種・民族、障害者、貧困者などが社会的スティグマの標的になることはしばしば見聞きするところであるが、それだけではない。ここでは、血縁のない家族を創ろうとする人たちが血縁をもつことは家族にとってごく当たり前と思っている人たち⁽¹⁾から浴びせられる社会的スティグマに焦点を当てながら、どのようにして非血縁家族は構築されていくかを、“不妊治療の選択→養子を迎える決断→幼年養子を迎える”という家族のライフサイクルによって考察し、非血縁家族を構築する人たちの社会的スティグマへの挑戦を通して、改めて家族とは何かを考える。

非血縁家族を構築する人たちが出会う社会的スティグマ

その1 幼年養子を迎える決断に至る過程

夫婦が結婚することによって新しい家庭をもつところに家族のライフサイクルの第一段階があると考えれば、夫婦の間に子どもが生まれることはその第二段階であると言える。そして、夫婦は親になる。ところが、この同じ段階のあり方がこれから取上げる幼年養子縁組家族では大きく異なる。すなわち、幼年養子縁組家族では子どもは夫婦の間に生まれない。通常は一体となっている「産むこと」と「育てること」のうち、育てることのみを引受ける決断をし、他人の生んだ子どもを迎えることによってはじめて夫婦は親になる。すなわち、「産む」部分を諦め、他者が生んだ子どもを「育てる」という決断を新たにし直すところに大きな特色があると言える。

さらに、このような決断は、大部分の夫婦の場合⁽²⁾、「子どもが生まれない」事態を打開するために行われる「不妊治療（生殖補助技術）」という経過を辿ってなされていく。

なぜ、夫婦の間に子どもが生まれないことからすぐに他人が生んだ子どもを迎えることに直結しないのだろうか。言い換えるならば、なぜ、それほどまでに子どもが生まれないことを問題視し、それを病気として治療しないと考えると考えていくのであろうか。そこに、親子の関係を血縁、すなわち生物学的つながりを前提に考えるわれわれの社会の風習という社会的スティグマを避ける方策が潜んでいる。「血は水よりも濃い」「血は争えない」などは血縁の重要性を端的に表した表現である（葛野、2000）。血縁家族の両親を対象に実施した筆者らの調査（Kosawa and Tomita, 1999）によると、図1に示すように、血縁のない子どもを育てる親をすばらしいと賛美するものの、自分には養子を育てる意思は全くないこと、そもそも日本人は養子を受け入れることに積極性がなく、養子として成長する子どもも社会的に受け入れられないという判断が強く現れている。そのまとめとして、結局のところ、血縁こそが家族にとって重要であるとする意見が、とくに父親においてかなりを占めていることが明らかである。

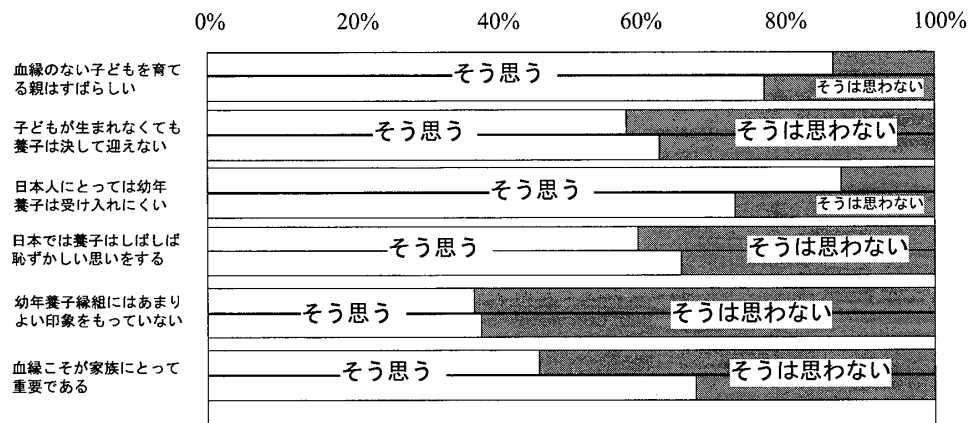


図1 非血縁・血縁に対する態度 (Kosawa and Tomita, 1999)
(上段：母親／下段：父親)

ところで、「わが国において、「血統」「血縁」「血族」など「同質な生命の共有」といった社会的な意味合いを帯びて＜血＞という言葉が日本語の中に定着したのは、意外なほどに新しく、江戸の中期あたりという。」（葛野、2000）。さらに、明治に入って、制度としての「家系」の維持が社会的わくぐみの中心になるにつれて、それをより強固に存続させていくことを端的に表すために、＜血＞という文字で始まる前述のようなことばがいっそう用いられるようになっていったのではないか。そして、その傾向が家族制度の崩壊後もひとびとのものの見方の中に定着しつづけて今日に至っていると見ることができる。

このことは、嫁入り後なかなか子どもが生まれない女性に対して「子なきおんなは去るべし」と子どもを生まない嫁は離縁の対象であると言ったり、「腹帯をしめるとあとの五十両」と嫁は身ごもって初めてその家の一員であると川柳に読まれるなど、女性は結婚し、子どもを産み、血縁社会を維持するためにあるという見方として浸透していった（沢山、

1998)。ここで文章を過去形で言うことに筆者は疑問を抱く。なぜならば、現代においてもそのような見方が皆無であるとは断言できないからである。

血縁のある子どもをもっている両親64組の協力を得て、現在実施されている生殖補助技術についての意見を尋ねてところでは、たとえ人工的な技術によってでも配偶者間の精子と卵子の受精による生殖補助技術（配偶者間人工授精、配偶者間体外受精）については肯定的な回答が多く見られるのに対して、いずれかの生殖細胞が第三者のものである場合には、その程度がずっと低くなっている（図2）。

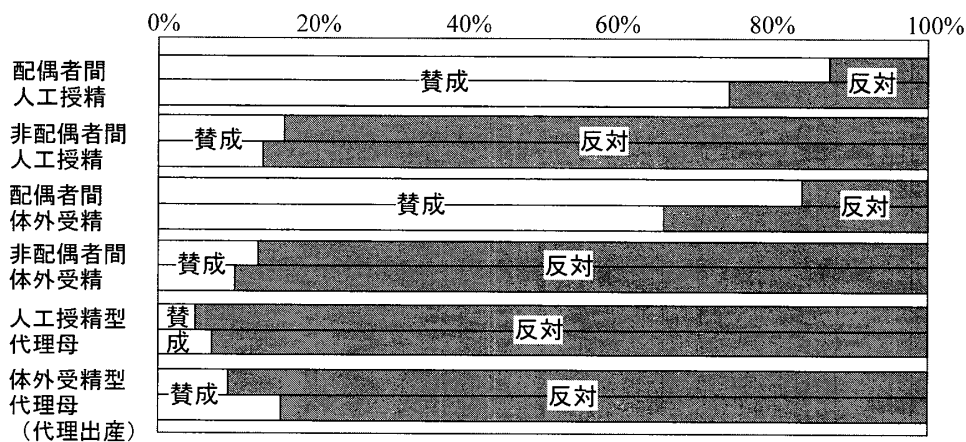


図2 生殖補助技術に対する態度 (Kosawa and Tomita, 1999)
(上段：母親／下段：父親)

ここに見られる傾向は、生殖補助技術に関する自然観についての浅井（2003）の考えと共通している。浅井は、『「日本人」にとって、「自然」というのは、倫理的な価値判断の指標である』としながら、『「自然」はどのような生殖技術を受け入れることができるかを判断するメルクマールである。かつて、帝王切開や会陰切開を不自然だとしていた意識は、出産が医療施設の中で医療的に扱われることが一般化することによって、その不自然さが払拭された。もちろん、これらの技術が「自然」になったのではなく、受容する側が不自然と感じなくなったのである。「自然」と表現される内実はずねに変化している。』と述べて、生殖補助技術・子どもをもつことなどに対する自然観について行った調査結果に触れ、『AID(非配偶者間人工授精)や提供精子による体外受精を「自然でない」とみる人が約75%いるのに対して、夫婦間の人工授精や体外受精が「自然でない」とする人は約35%であった。また、代理出産や代理母を「自然でない」とする人は、それぞれ79%、83%であった』と報告している(浅井、2003)。二つの調査結果を通して注目すべきことは、手段はどうあろうともとにかく両親の生殖細胞によってなされた受精の結果、配偶者が妊娠して、子どもが出来ることは認めるものの、片方がいずれかの配偶者の生殖細胞でもう一方が配偶者のものでない場合、さらには、代理母のように妊娠・出産が第三者に託される場合は、わ

が国では戸籍の上すべて実子となるものの、両親がもうけた子どもとは認めない風潮があると判断できる。

しかし、現実においては、社会は医療分野で行われている生殖補助技術にこれほどの細分化された手法があることを理解されていない。一般レベルの認識では、AID (Artificial Insemination by Donor) にすべてを代表しているのが精々である。そして、先に触れたようになによりもこのような不妊治療は密かに行われていくのが実情である。そして、そのことは、後述する子どもの出自をめぐる大きな問題につながっていく。

非血縁家族を構築する人たちが出会う社会的スティグマ

その2 幼年養子縁組による親子関係の形成

Daly(1990)は、養子を育てる親となる前に夫婦は“生物学的親というアイデンティティ”から解放される必要があると述べているが、これは、“親になること”イコール“血縁のある子どもの親になること”という風習に囲まれている限り、夫婦にとって社会的スティグマとの闘争のはじまりをも意味している。社会は、養子縁組を“親になる第二（の最良）の選択（“second-best” route to parenthood）としてしか見ないし、育ての親の子どもへの愛情も二流の愛情であり、さらには、血縁のない子どもは遺伝的過去が分からない（出所が分からない）という意味で二番手であり、成長後に問題を起こしやすい存在としてしか見ていないのである。要するに、”本当の親子（real parent and real child）“ではないのである（Miall, 1996）。

考えてみれば、社会は無謀なスティグマを貼るものである。“本当の親子”とは何か。それは血縁のある親子のみを指していることは明らかであり、このことによって、それ以外の親子のあり方を無視しようとしている。しかし、実際には血縁のない親子は、ここであげる幼年養子縁組による親子、生殖補助技術による親子などの他にも親の離婚や再婚によって成り立つ義理の親子など多様である。“本当の親子”という言葉はこのような親子をなきものにするのである。

さて、現実的には、辿り着いた夫婦の決断が養子を迎えることに直ちに繋がる訳ではない。

わが国に於ける現行の養子縁組制度には、普通養子縁組と特別養子縁組がある。普通養子縁組制度は、1898年にできた制度で、「家」の存続が主な目的であり、戸籍には実父母の名前と養子であることが明記され、協議によっては離縁が可能であり、他に実子がある場合は、財産分与の際に不利な扱いを受けることがある。一方、特別養子縁組制度は、1988年に発足し、子どもの利益を守ることを目的としたものである。この制度では、養子ではなく「実子」として戸籍謄本に記載され、養子の事実や実父母の名前などの記載はなく、財産分与についても他の子どもと同等な扱いがなされる。このことから、子どもと産みの

親との親子関係を法的に終了させて、育て親を唯一の親と確定する。このために、家庭裁判所に縁組の申し立てが行われた後、夫婦が育て親としてふさわしいかどうか6ヵ月間の試験養育状況などを踏まえて審判される。また、こうした手続きを支援する縁組斡旋団体も、それぞれに縁組を斡旋する育て親の基準を設けている。

例えば、筆者が関係している特定非営利活動法人（NPO）団体では、育て親となることを希望する夫婦に対して数回にわたる面接を行ない、夫婦の子ども・子育て観や夫婦関係など、さまざまな面から育て親としてふさわしいか否かを判断している。そして、当該NPOの基準を通過した夫婦はさらに研修を受けてようやく育て親候補として登録されるのである。

このNPOでは、予期しない妊娠や出産に悩むひとの相談を受け、産みの親がどうしても育てられない場合に、子どもの福祉を最優先とした幼年養子縁組を仲介している。従って、縁組対象となる子どもの多くは出生間もない乳児である。育て親と子どもとの出会いは、子どもが最も若い場合としては、産みの親が出産して一週間以内に行われる。

ある日突然に、夫婦生活の場が子どもとの三者関係の場が変わることは、育ての親にとっては大きな変化である。血縁家族における“親になることへの移行”については、Belsky (1995)が「子供をもつと夫婦に何が起こるか」において詳細に検討し、妻の妊娠を知ることによる夫への影響、さらには、妻の出産、夫婦ともども行う子育てなどがそれまでとは違った夫婦関係の形成に影響していくことを明らかにしているが、非血縁家族の場合にはこの過程は一切ないのである。しかし、筆者らの調査によると事態は異なるものの養子を迎える決断から現実に子どもを迎えるまでの経過は、そこでなされる第三者を交えた話し

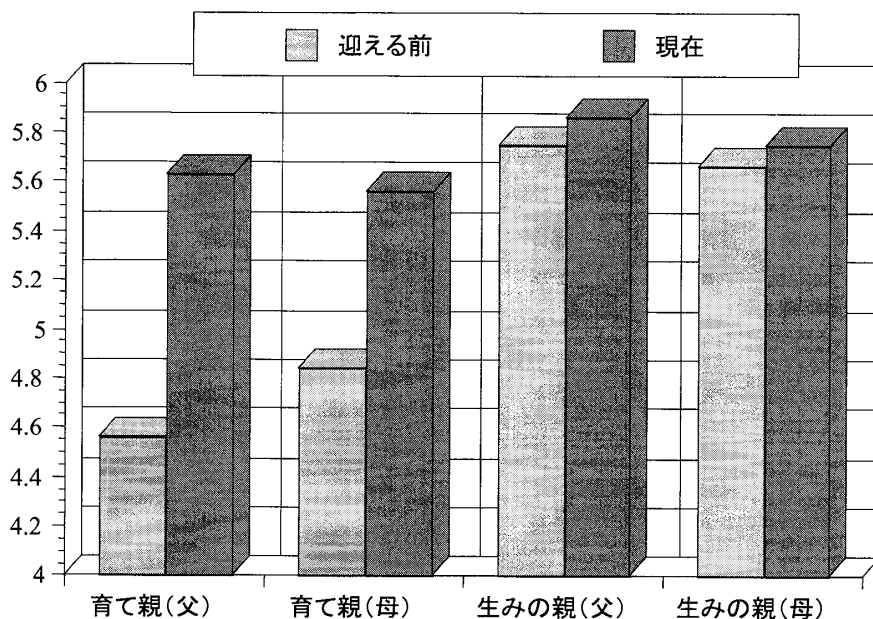


図3 子どもを迎える前と現在の夫婦関係（富田・古澤、2004）

合いや夫婦相互の意思確認の積み重ねによって飛躍的に変化していることが伺える。

図3において、育て親において、子どもを迎える前の評定値が産みの親の場合よりも有意に低いのは、養子を迎える決断をする前の不妊治療がもたらす影響の現れと判断される。すなわち、夫婦いずれかが治療の対象となり、そのことがお互いの齟齬の原因にもなり、意見の相違を起こしていくことがあげられる。それほどに生殖補助技術は夫婦関係に動揺を起こすものなのである。

また、子どもを迎えてから約6ヶ月の試験養育状況が設けられていることも幼年養子縁組夫婦には心理的影響を与えていることが予測される。国外においては、幼年養子を迎えた夫婦はいつ産みの親が子どもを取り戻しにくるのではないかと不安を抱くと指摘されているが、このことを解決するために次に述べるオープン幼年養子縁組が行われている。しかし、実際にはこのような時期を経て、夫婦は確実に育て親となるのである。

なお、最初の子どもの3～5歳になると二番目の養子を迎える育て親も多い。この場合には、それまで形成されていた夫婦・父母子関係が二人目の子どもを迎えることによって変化し、夫婦・父母子関係に加えてきょうだい関係が形成されていく。

社会的スティグマを乗り越えて非血縁家族を構築する人たち

——オープン幼年養子縁組——

幼年養子縁組のごく一般的形態は、従来子どもの成長後もひたすらその過去を隠し続けるいわゆる”confidential or closed adoption”であった。このことは、育て親が子どもに真実を知らせることが親子のつながりを絶つことに結びつくことを恐れてのことであり、その背景には、非血縁への社会的スティグマが強く働いている。

ところが、このようなクローズな幼年養子縁組においては10代に入って子どもに問題行動が現れることがしばしば指摘されていた (Brodzinsky and Pinderhughes, 2002, Bugental and Happaney, 2002, Grotevant and Kohler, 1999⁽³⁾, Stams, G., Juffer, F., Rispen, J. and Hoksbergen, A., 2000⁽⁴⁾)。それは、子ども達が様々な角度から物事を考えられるようになるにつれて、自分が親と似ていないことに気づいたり、自分の生い立ちについてより詳しく知りたがるようになり、このことが明らかにされなかったり、自分が予想もしていない事実を知らされたりすることによって、親への不振が噴出するからである。そして、何よりもその背後に“自分が何者であるか”への回答が不明確になり、いわゆる自己同一性の形成に支障を来すことである。Sants(1964)は、この問題を“血縁の困惑 (genealogical bewilderment)”と称して、親と子の間に生物学的相互性がないことが心理的・身体的特性についての子どもから親への同一化を阻むことによると指摘している。そこで、子どもが示す行動は、いわゆる“自分探し”としての“産みの親探し (searching)”

である。

ところで、“自分探し”としての“産みの親探し”は血のつながらない両親に育てられた子どもにのみおこることに限らない。前述した生殖補助技術は、これまでにとくに AID によって多くの子どもを出生させてきた。そして、子ども達が成長してから、ふとした機会に自分の出生についての事実を知り、生物学的父親を探しあてようと努力をしている人たちを現存させている。ある米国人 M さんの場合を春日 (2002) より引用すると次のようである。

『M さんは、4 人きょうだいの次男として 1945 年に生まれた。…不妊症だった父親は一人の子どもを養子で、3 人を AID によって得たが、周囲にはそれを秘密にしていた。少年のころ M さんはよく父親に似ていないとからかわれ、自分でもそれが不思議で、家族の中に何か嘘があるという疑念が片時も頭から離れなかったという。…本当は音楽や絵画が好きだったのに、スポーツ万能の父のようになるべきだと思い、野球やサッカーに打込んだ。まったく人工的に作られたアイデンティティを信じ、自分が本当に興味を持っているものすべてを拒否したのだった。

37歳の時に転機が訪れた。1983年、父親と弟が相次いで原因不明の病で亡くなり、M さんは自分も同じような病で死ぬのではないかという恐怖にとらわれた。そして、そのことを母親に打ち明けたところ、逆に意外な事実を告げられた。

「母は、私が父でなくドナーの精子によって生まれたのだと言った。すぐには信じられなかったが、真実を知ったことでとても解放された気分でした。」しかし、暫くしてその気分は、次のような越えがたい壁を自分に作っていった。「両親は、自分のアイデンティティを知る私の権利を根本的に無視しました。恐ろしいことです。なぜならば、その秘密があったことで私ははるかに深く傷ついたからです。私の知る限り、AID で生まれた子どもたちはみな同じ気持です。』（筆者により一部省略・修正されている）

その後、M さんは今日まで AID で生まれた人々のネットワークを作り活動を続けている。

幼年養子縁組による子ども達の“自分探し”としての“産みの親探し”と生殖補助技術によって生まれた子ども達のそれは、ともに子どもが「自分とは何か」を自問する時に会う出自、すなわち、自分のルーツを明らかにする人間として当然の旅であると考えることが出来る。そして、この問題こそが人間を子どもからおとなに成長させていく原動力である。

幼年養子縁組の場合、隠蔽し続けることが子どもの成長につれておこす自分のルーツ（出自）を知りたいという要求への対処を不適切にしがちにするために、子どもが周囲に対する不信感や自分の心の動揺のために様々な acting out を起したり、自己アイデンティティの健全な形成を妨げることが明らかにされるにつれて、より信頼感を持ち合える親子関係

を形成するために、すべてをオープンにした幼年養子縁組形態として、“open adoption”を推進する試みが1980年代に入ってアメリカを中心に進み、今日に至っている。そして、わが国でも数こそ僅かであるがその試みがなされている。

ここで、オープン性（openness）とは、迎えた子どもに育ての親以外に産みの親が存在することを知らせることと育て親、産みの親、子どもという三者の人間関係を現実的に維持し、相互の親密感を維持していく努力していくことである。それは、具体的には、育ての親・産みの親、そして、子どもまでもが、相手の名前、住所を知っていること、連絡を取り合っていること、会ったり、訪問したりしていることがどの程度実現しているかによってその程度が異なる（Brodzinsky, 2004）。

Grotevant, McRoy, Elde, Fravel(1994)は、幼年養子縁組のオープン性と育て親の心理状態を通して、家族成員間の結びつきとの関連を検討している。それによるとよりオープンな養子縁組であることが育て親に産みの親への共感を増し、安定感を強め、子ども自身に養子であることの理解を容易にし、捨てられたという思いを抱かせなくしている。また、オープンな幼年養子縁組が産みの親に及ぼす影響についても喪失感を低減し、現実を受入れやすくしていることが明らかになっている（Grotevant and McRoy, 1998）。子どもが起こす幼児期以後の問題行動についてもクローズな場合よりも件数が少ないとの報告もなされている。いくつかの縦断研究は、育て親が継続的にオープン性を維持し続けようとする熱意がこの産みの親・育て親・子どもという三者関係を良好にしていく決め手になっていることを明らかにしている（Siegel, 1993, 2003）。

しかし、現在のところこの幼年養子縁組が育て親、産みの親、そして、子どもにとって確定的に望ましい効果をもつものであるか検討の余地を残している。その大きな理由は、この養子縁組形態のオープン性については、それを実行する非血縁家族において様々な方法をとっていることにより、その力動性を特定のルールによっては解明できないとする意見も出ている。

ところで、オープン性を構成するもう一つの支柱が育ての親による子どもへの「テリング（telling）、または、テリングプロセス（telling process）」である。テリングとは、“子どもが産みの親の存在を理解できるように育ての親が行う継続的な試み”と説明することが出来る。言い換えるならば、産みの親の存在やそれに関わる事柄は、育ての親がずっと隠しておいてある日突然子どもに打ち明けるというものではなく、また、一度子どもに告げてそれで終わるものでもない。隠すことなく、継続的に、子どもの成長にあわせて語り続けられるものである。それは、storytelling（お話し聞かせ、或いは、語り聞かせ）で使っている”テリング”である。そこでは、子どもに産みの親の存在を子どもの認知的・情緒的・社会的発達に合わせながら、継続的に行っていく対話として実行される⁽⁵⁾。

さて、テリングがもたらす効果であるが、育て親にとっては、子どもの心に自然に産みの親の存在を作りあげる試みが出来ていくことである。と同時に、産みの親の存在なくして、現在の家族は形成されないこと、つまり、産みの親・育て親・子どもという三者関係こそが子どもが存在する場であるという見方を育ての親として自然に意識されていくのである。幼い子どもにテリングすることは子どもがそのことをどう理解しているかに不安を抱くことでもあるが、子どもからの反応を手がかりに伝わることをひとつひとつ確かめるのは目の前の子どもの姿をより現実的に把握することにもなる。

テリングを実施している両親がもつ子どもの価値・子育て観を血縁家族の両親のそれと比較した筆者らの調査によると、図4に示されるように、いくつかの点に相違が見いだされている。それは、前者において、母親の場合に、子育ての負担感が少なく、子どもを家系の継承のためにあるとは見ていないこと、両親ともに家族の絆をより強く感じていることなどである。これらのことがテリングを実施していることと直線的に関連するか否かは現在のところでは明らかではないが、子育てという社会的責務を十二分に認識しながら、子どもをひとりの人間として育て上げようとする姿勢が端的に現れていると判断できる。

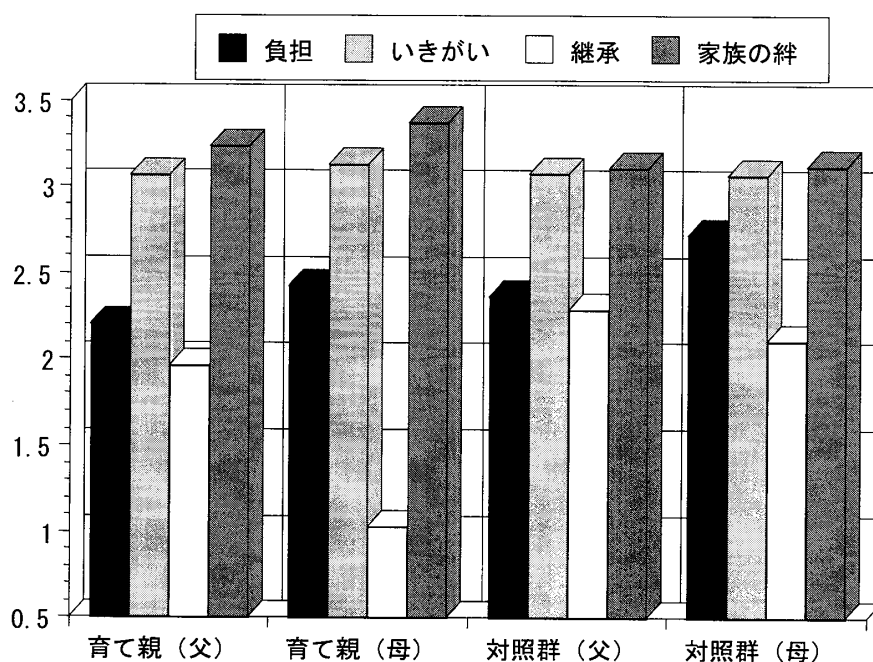


図4 子どもの価値・子育て観 (富田・古澤、2004)

さらに、育て親が子どもにどのようにテリングを行っているかを57組の両親について調査したところでは、テリングは親子ともにくつろいだ場面(例えば、お風呂に入りながら、絵本を読みながらなど)において行われること、テリングを初めて行う時期の選択としては、(1)子どもが親から伝えられたことをどのように理解していくかを重視するよりは、むしろ、子どもが幼いからこそ、何の気負いもなく、当たり前のこととして、自分達の出会

いに触れながら行っている両親、(2)子どもが親による話しを理解できるようになる年齢を3歳頃からと判断し、それ以後に機会を見ながら行っている両親、(3)“子どもに尋ねられて、初めて行っている両親（7歳になった時（調査実施時は10歳）に、「ぼくはどこから生まれてきたの」と子どもから尋ねられたのに対して、本当のことを伝えた）の3グループに分けられた。テリングを行う頻度としては、子どもが幼い時から行う場合の方が頻繁であること、テリングの実施に伴う不安は、3歳以後に初めて行う両親の方が子どもがごく幼い時からおこなった両親よりも高かったことなどが明らかになった（古澤他、2003）。

一方、子どもへの効果は、子どもが自分のルーツを知ることによって、自分がこの世の中に存在していることにアイデンティティを抱けるようになる。このことは、あくまでも秘密にしていることによって突然起こる精神的動揺を未然に防ぐために、また、なによりも健全な自己形成を考えるために必要と見られる。すでに、国外においては、養子であることの子どもの理解を容易にするという所見を明らかにした研究（Wrobel, Ayers-Lopez, Grotevant, McRoy and Friedrich, 1996, Grotevant and McRoy, 1998）も公表されているが、わが国においては、これまでのところ若干の記録が公表されるに留まっていた。

そこで、筆者らは、次のような二つの方略によってこの問題に取り組んでいる。その一つは、子どもはどのようにして親を理解していくかを把握することである。具体的には、産みの親と育て親が登場する一連の絵物語図版を提示し、その物語についての子どもの反応から、子どもが親をどのようなドメインにおいて理解しているかを検討していくものであり、もう一つは、子どもの自己像を把握することである。具体的には、正反対な行動（学業場面、運動場面、友達との場面、親との場面）を取る子どもの姿を対にして表した20枚の図版を用意して、自分はどちらの子どもにより近いかを選んでもらうことにより、その子どもが自分をどのように把握しているかを理解するものである。現在、2～3歳、5～7歳の子どもをもつ養子縁組家庭を訪問し、子ども達の個別反応を収集すると同時にその家庭でなされているテリングが子どもの理解にどのように作用しているかを検討しているところである。

中間的に得られている結果としてあげられることは、絵物語課題では、(1)子ども達は産みの親と育ての親が異なることを理解できていること、(2)子ども達は分配課題においても産みの親を平等に扱っていること、(3)容姿が産みの親と育て親どちらにより類似するかという課題についてはまだ理解でなかったこと、自己像課題では、(1)自分をより正直に評価する傾向を示していること、(2)自分は両親から受容されていると認知する傾向が見られることなどが明らかになっている（古澤・富田・石井・塚田、2004）。

これらのことから親の語りを子どもがまだ理解できていない年齢であっても、親なりにし続けていくところに産みの親の存在を子どもが受け入れていく手法としてのテリングの

意義が浮かび上がってきたと言える。そして、テリングという育て親による継続的な試みを通して、子ども自身が育て親、産みの親それぞれが自分にとってもつ意味をはっきりと受け止め、自己形成に役立たせていくものとする。

結 論

非血縁という社会的スティグマをはね除けて子どもの健全な成長を保障する場としての家族の構築はその数こそ少数ではあるが、着実になされている。そのことは、同時に社会的虚構の上に胡座をかいて、安泰を決め込んでいる多くの血縁家族のあり方を根本的に検討し直す時機の到来を告げている。もちろん、このことは Wegar(2000)が指摘しているように、社会を構成する一人一人の気づきによって初めて実現することは言うまでもない。

Kirk(2003)は、血縁家族が構成する社会の非血縁性を見くびる態度を批判しつつ、なお、大部分を占める血縁社会においては、血縁がないことはどうしても不利な条件となるが、それに肯定的に対処し、血縁親子関係との相違を容認していくことで、養親子の絆が形成されることを主張し、このような過程で重要なのは、1) 自分たち親子は、かけがえのない親子であると確信する、2) お互いの気持ちに共感しあいお互いを必要とし助け合う、3) 子どものアイデンティティ形成の困難さなど、それぞれの問題を話し合い理解するコミュニケーション能力を持つなどであることを強調している。1964年の著書で彼が表題とした“Shared Fate(共有される運命)”とはまさに血縁・非血縁の分け隔てなく、すべての人間が分かち合う共に生きる命を意味していると考えられないだろうか。

注

- (1) 葛部(2000)は、血縁・非血縁という枠組みにとらわれないで家族を構成している種族の存在を指摘している。
- (2) 古澤他(1997)の調査の協力者の場合には90%が該当していた。
- (3) これらの文献は総覧の中でこの点について言及している。
- (4) 国際養子について実証したものである。
- (5) 産みの親への影響については十分に明らかにされておらず、今後の課題として残されている。

付記：この論文は、1999年度比較文化研究所個人研究「若年養子に対する養父母からのテリング(真実告知)に関する日米比較」をもとに得られた所見を整理し、考察したものである。この研究への当該研究所よりの助成に謝意を表したい。また、その後2001～2003年度学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))「非血縁家族における子どもへの真実告知：実親サーチに関する発達心理学的検討」による研究推進にあたって、富田庸子さん(鎌倉女子大学)からは研究分担者として、石井富美子さん(立正大学)、塚田-城みちるさん(東京都立大学大学院)からは研究協力者として多くの支援を得たこと、また、第2種社会福祉事業(東京都)特定非営利活動法人環の会事務局横田和子さんおよびサポーター家族の皆さんから多くの協力を得たことに謝意を表したい。

引用文献

- 浅井美智子 2003 生殖技術とゆれる親子の絆 藤崎宏子編 親と子—交錯するライフコース シリーズ<家族はいま・・>第2巻 ミネルヴァ書房 59-82
- Belsky, J. & Kelly, J. 1994 The transition to parenthood. Delacorte Press (安次嶺佳子訳 1955 子供をもつと夫婦に何が起こるか 草思社)
- Brodzinsky, 2004 Personal communication
- Brodzinsky, D. and Pinderhughes, E. 2002 Parenting and child development in adoptive families. In Bornstein, M. (Ed.) Handbook of Parenting (2nd Edition) Vol.1. Children and Parenting. Lawrence Erlbaum Associates 279-311.
- Bugental, D. and Happaney, K. 2002 Parental attributions. In Bornstein, M. (Ed.) Handbook of Parenting (2nd Edition) Vol.3 Being and Becoming a Parent. Lawrence Erlbaum Associates 509-535.
- Daly, K. 1990 Infertility resolution and adoption readiness. Families in Society: The Journal of Contemporary Human Services, 71, 483-492.
- Grotevant, H., McRoy, R., Elde, C. & Fravel, D. 1994 Adoptive family system dynamics: Variations by level of openness in the adoption. *Family Process*, 33, 125-146.
- Grotevant, H. and McRoy, R. 1998 Openness in adoption: Connecting families of birth and adoption. Sage.
- Grotevant, H. and Kohler, J. 1999 Adoptive Families In Lamb, M. (Ed.) Parenting and child development in nontraditional families. Lawrence Erlbaum Associates 151-190.
- 春日真人 2002 AID で生まれた子どもたちに出会って 助産婦雑誌 56巻、76-81
- Kirk, D. and Tansey, B. 2003 Exploring Adoptive Family Life: The Collected Adoption Papers of H. David Kirk Ben-Simon Publishers.
- 古澤頼雄・富田庸子・鈴木乙史・横田和子・星野寛美 1997 養子・養親・産みの親関係に関する基礎的研究—開放的養子縁組 (Open Adoption) によって子どもを迎えた父母— 安田生命社会事業団研究助成論文集 第33号、134-141
- Kosawa, Y. and Tomita, Y. 1999 Biological parents' attitudes toward adoption and alternative fertilization techniques Science Reports of Tokyo Woman's Christian University Vol.50 No.3 1623-1631
- 古澤頼雄・富田庸子・石井富美子・塚田-城みちる 2004 非血縁家族における子どもへの真実告知—実親サーチに関する発達心理学的検討— 平成12~14年度学術振興会科学研究補助金 (基盤研究(C)(1)) 研究成果報告書
- 葛野浩昭 2000 人類学からみた親子関係の多様性 藤崎宏子編 親と子—交錯するライフコース シリーズ<家族はいま・・>第2巻 ミネルヴァ書房 107-131
- Miall, C. 1987 The stigma of adoptive parent status: Perceptions of community attitudes toward adoption and the experience of informal social sanctioning. *Journal of Applied Family and Child Studies*, 36, 34-39.
- Sants, H., 1964 Genealogical bewilderment in children with substitute parents, *British Journal of Medical Psychology* 37, 133-141.
- 沢山美果子 1998 出産と身体の近世 勁草書房
- Siegel, D. 1993 Open adoption of infants: Adoptive parents' perceptions of advantages and disadvantages. *Social Work*, 38, 15-23.
- Siegel, D. 2003 Open Adoption of Infants: Adoptive Parents' Feelings Seven Years Later. *Social Work*, 48(3), 409-419.
- Stams, G., Juffer, F., Rispens, J. and Hoksbergen, A. (2000) The development and adjustment

- of 7-year-old children adopted in infancy. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 41(8) 1025-1037.
- 富田庸子・古澤頼雄 2004 Open Adoption 家族における育て親の態度—子ども・子育て観と夫婦関係— *中京大学心理学研究科・心理学部紀要* 3巻2号 37-51
- Wegar, K. 2000 Adoption, family ideology, and social stigma: Bias in community attitudes, adoption research, and practice. *Family Relations*, 49(4), 363-370.
- Wrobel, G., Ayers-Lopez, S., Grotevant, H., McRoy, R. & Friedrich, M. 1996 Openness in adoption and the level of child participation. *Child Development*, 67, 2358-2374.

〔中京大学教授・元本学文理学部教授（心理学）1999年度個人研究員〕